

小中学校教員の子どもの親の職業に起因する心理的経験の検討

—母親/母親の教職に対する捉え方の差異の発生要因—

内田早香¹・岡本祐子¹

Examination of elementary and junior high school teachers' children's psychological experiences which parents occupation elicit: The factors that cause differences in children's cognition towards mothers and mothers' occupation

Sayaka Uchida and Yuko Okamoto

Issues of Japanese elementary and junior high school teachers' stress and working pressure have been argued, but their working environment has not improved. Female teachers are particularly prone to various difficulties in achieving compatibility with family life, especially with child rearing. In this study, we conducted 1) the semi-structured interview for children whose mothers were elementary and junior high school teachers, and 2) the questionnaire survey towards mothers to investigate their environment of child rearing and the children's unique psychological experiences. As a result, there are mainly two aspects of children's unique psychological experiences. The one is related to mothers, such as their mothers' free time and mental space to be in contact with them. And the other is related to evaluation from the surroundings, such as stereotyped as "a teacher's child". This unique psychological experiences of teachers' children elicited children's affirmative or evasive feelings towards mothers and mothers' occupations.

Key words: Mother-child relationship, Elementary and junior high school teachers, Occupation, Child rearing

問題

1. 教員の就業事情・ストレス研究

教員の仕事は年々増加の一途をたどっており、教員の多忙化の問題は1950年代から指摘されているにもかかわらず（神奈川県教育研究所，1952）、今なお深刻な問題となっている。2010年に全国規

¹ 広島大学大学院教育学研究科

模で行われた最新回の第 5 回学習指導基本調査 (ベネッセ教育総合研究所, 2010) によると, 教員の平均勤務時間は, 小学校教員で 11 時間 29 分, 中学校教員で 12 時間 03 分となっており, 正規雇用の有職者の平均勤務時間 9.2 時間 (日本労働組合連合会, 2012) と比べて, 2 時間以上長い上, 年々増加傾向にある。また, 同年の有職者全体の平均睡眠時間が 6 時間 55 分であるのに対して, 小中学校教員の平均は 6 時間を切っており, 約 1 時間も短い結果となっている。

ある中学校の職員室で教員の疲弊に焦点を当てて参与観察を行った落合 (2009) によると, 中学校教員は朝の 7:30 から夜の 7:30 頃まで, 休み時間も教員同士の連絡や授業準備, 生徒への対応に追われ休みらしい休みもない中, 12 時間にも及ぶ勤務に携わっているという実態が観察された。他の研究報告からも日本の学校現場全体が, このようなストレスフルな仕事の在り様であることは見て取れる (落合, 2009)。

また, 佐藤 (1994) は, 教師文化の先行研究などから, 教師の仕事を「再帰性」「不確実性」「無境界性」の 3 つから特徴づけた。「再帰性」は, 教師の仕事の責任が「どこにもやり場のない」ものであり, 教師は教育実践について, 恒常的な孤独と不安にさらされていることなどを示す。「不確実性」は, 教育の実践現場においてどの教室でも確実に効果的な教育理論や技術などはなく, 教師の実践を客観的に評価できる安定した基準は存在せず, 何がよい教育なのかも多種多様で, 教育の結果も見えにくいものであることを示している。「無境界性」は, 上記の教育の 2 つの特徴によって, 職域・責任領域が無制限に拡大され, その専門性が空洞化することを示す。たとえば, 子どもの問題行動に際して家庭など学校以外の領域に踏み込まざるを得ないことや, ほかの専門職と異なり, 患者の完治や事例の解決などのような明確な仕事の完了がないことが挙げられる。さらに, 「無境界性」は恒常的な多忙を引き起こすだけでなく, 教師の仕事を雑務の領域で多忙なものとし, 専門性から遠い部分で, 疲労とストレスを招いている。

以上のことから, 教員は「どこにもやり場のない」教育実践上の責任をひとりで背負って, 自分の仕事について確実な安定した評価が得られないなか, 拡大する職務領域に対応していくことで, 恒常的な多忙とそれによる疲労・ストレスを抱えながら, 長時間労働をしていることが分かる。

2. 教員のワーク・ライフ・バランスの問題

近年, そうした教員の長時間労働や多忙化により, 教員の仕事時間が生活時間を削らせている現状を踏まえ, ワーク・ライフ・バランス (以下, WLB) の考え方から, 教職にアプローチする研究が見られる。WLB について, 内閣府による仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 憲章 (2007) では, 「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き, 仕事上の責任を果たすとともに, 家庭や地域生活などにおいても, 子育て期, 中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」と定義されている。教員の WLB に関する研究では, それまでの教員の労働についての研究のなかでは, 職務遂行に大いに影響を与えることが予想される仕事以外の生活時間や, 家庭生活などについてほとんど検討がなされていないことを指摘し, 生活時間や家庭生活に踏み込んだ内容となっている (高橋・濱岡・勝沼, 2009: 田野井ら, 2012: 直井・佐藤, 2013 など)。

また、第5回学習指導基本調査（ベネッセ教育総合研究所，2010）において、「学習指導」，「子どもとの関係」，「保護者や地域との関係」，「現在の職場」の4項目と合わせて、「教員生活と私生活とのバランス」について、どのくらい満足しているか尋ねている。主な仕事内容である教材等の準備が満足にできているかを尋ねた「学習指導」と、「教員生活と私生活とのバランス」の2項目についてのみ4～5割が満足していると答え、その他の項目については約7～8割が満足していると答えており、「教員生活と私生活のバランス」についての満足度は低めとなっている。しかし、WLBの満足度は日本全体として低い傾向にあるため、教員について特に低いとは言えない。ただし、教職は企業勤務等と異なり、残業や休日出勤について、保護者や生徒などの外部から、「献身的な先生」，「熱心な先生」というふうな肯定的な評価を下されがちであり、積極的にWLBを追求しようとする姿勢が取りにくい環境であることが予想される。

教員のWLBに関する先行研究として、田野井ら（2014）の研究では、関東圏内にある政令指定都市の公立中学校教員260名を対象に、質問紙調査を用いた量的分析によって、教員役割と生活における自分役割との役割葛藤が、仕事と生活のバランスに及ぼす影響について検討した。その結果、教員が自分役割を行うための生活時間を削って教員役割に従事していることなどが実証された。

また、直井ら（2013）は、茨城県水戸市内の公立中学校教員85名を対象に質問紙調査を実施し、ワーク・ライフ・バランス達成度と、またその個人の基本属性、家庭状況、仕事状況と仕事に対する意識との関連を検討した。まず、ワーク・ライフ・バランスについては全体の94.1%が達成されていない状況であった。また、中学校教員のワーク・ライフ・バランスの達成には、年齢の低い手のかかる子どもがいない、あるいは親など家事の担い手が自分のほかに確保できるなど、家庭責任がないことが重要であることが示唆された。

さらに、新潟市の公立小中学校教員86名を対象にワーク・ライフ・コンフリクトなどについて検討した高橋・濱岡・勝沼（2009）によると、家事負担の大きい女性のほうが男性よりも仕事領域から家庭領域へのコンフリクトが高いことが示された。また、質問項目の中で平均点の高かった項目として、「自分が家族と過ごしたい時間を思っている以上に仕事にとられる」、「仕事に時間がとられるため、仕事と同様に家庭での責任や家事をする時間がとりにくい」、「職務を果たすのに多くの時間を使うため、家族との活動ができないときがある」、「仕事から帰ったとき、くたくたに疲れていて家族と色々なことをしたり家族としての責任を果たせないことがよくある」、「仕事から帰ったとき、精神的に疲れきっていて、家族のために何もすることができないことがよくある」が挙げられている。

3. 教員の子育てに関する研究

上述の先行研究は、主に教員という職務を遂行する上で、子育てや家庭生活がどのように関わってくるか、という視点であった。大谷（2009）は、女性教員の資質や生活について子育ての視点から検討している。また、大谷（2009）によると、近年それ以前に教員の子育てについて調査した研究には、1910～1930年代の女性教員の職業と家庭の両立問題に各地域の女性委員会がどう取り組んだか分析した斉藤（2008）や、高橋ら（2001）の1940年代に師範学校を卒業し教員として働いた女

性たちに教員生活と子育ての両立についてヒアリング調査した研究などがあるが、これらは女性教員の働き方の歴史について研究したものであり、数も少ない。

高橋ら (2001) の調査によると、ヒアリングした当時の女性教員たちは、仕事と家事・育児との両立ではなく、子守りや親類縁者等の他者に任せることで教員を続けていたことが伺える。ヒアリングの中で、「親として学校に行ったのは、上の子の小学校 1 年生の 1 学期末の個人面談のみ」というコメントもあり、その当時は教師でありながら自分の子どもの教育にはほぼ参加できなかった面も見える。

また、大谷 (2009) は子育て中の女性教員と保育士が直面している問題について調査しており、調査対象は一地域であるが、現代でも、子どもの教育に携わっているながら、教員・保育士のままで自分の子どものための時間を十分にとれないという現状が伺えると述べている。さらに、教員のライフコース研究においては、出産や育児は女性教員にとってかなりの負担となることから、教職の危機として取り上げられており、出産・育児を直接の原因として離職するケースも少なくない (山崎, 1994)。教員のライフコースとキャリアについて研究した細江 (1996) によると、1993 年に退職者を含む 2262 人の回答を得た「教職員の生涯生活設計に関する実証的研究」の調査研究から、女性教員の退職前辞意理由は「家庭との両立」が最も多く約半数を占めており、また辞めたいと思う理由についても、子育て期にあたる 30～39 歳では「家庭との両立」が約 8 割を占めていた。このことから、女性教員にとって、子育て期の仕事と家庭との両立は大きな課題となり得ることが分かる。

しかし、こうした教員の WLB や家庭生活、子育てに関する研究は、非常に少ない。また、研究分野としても経済学や社会学的な視点で取り上げられたものがほとんどであり、教員の職業継続や職務遂行上のパフォーマンスの問題に帰結して制度上の改善を訴えるものが多く、家庭生活への影響が取り沙汰されているにも関わらず、純粋に教員の家庭生活の面へのアプローチや、女性教員の教職の危機の一つとされる子育てについて、心理学的視点から研究がなされたものはほとんど見受けられない。

4. 母親の養育態度・行動と就業との関連

母親の養育態度・行動は、子どものあらゆる発達に影響を及ぼす重要なものである。それらを規定する要因は、夫婦関係や社会的ネットワーク、就業、パーソナリティなどあらゆるものが存在する。特に就業については、母親の就業が一般的になるに従い、就業の有無による検討に始まり、勤務スケジュールや仕事量などの就業特性や職場ストレスによる家庭や子どもへの影響についての研究が国内外でなされてきた。以下、母親の養育態度・行動と就業との関連について、(1) 多重役割理論、(2) 職業ストレスの二つに分けてレビューする。

(1) 多重役割理論

就業する母親を捉える理論として、多重役割理論がある。これは、仕事や子育てなど母親が複数の役割を担うことと、母親の心身の状態の関連を説明／予測する理論であり、多重役割を担うことの負担感や疲労を重視する役割荷重仮説と、複数の役割を担うことで社会的アイデンティティが蓄積され、自尊心や充実感が高まるとする役割増大仮説である。この理論を基に、母親の労働時間の

長さによって、しつけや情緒的支援といった養育行動の質や、家庭環境の違いが検討されているが、労働時間が長いと養育行動の質が低下しており、短いほうがより豊かな家庭環境を提供していることが確認されている (Bogenschneider et al, 1997 ; Percel & Menaghan, 1994)。

また、この理論を基に、Roeters et al (2010) は、オランダに住む学童期の子どもを持つ母親 929 名を対象に、就業特性と親子関係の質の関連を検討した。そして、週末勤務や夜間勤務といった脱標準型勤務スケジュールが母子間の共有行動の頻度を高める場合も、阻害する場合もあり、それが母子関係の質に良くも悪くも影響することが確かめられた。これを踏まえて、Roeters et al (2010) は、就業特性が母子関係に与える影響はコンフリクトな部分と恩恵を与える部分の両面があることを認識することが重要であるとしている。このため、役割荷重仮説と役割増大仮説は、どちらかが就業と養育態度・行動について規定するものではないと考えられる。

(2) 職業ストレス

末盛 (2011) によると、職業ストレスが家族や子どもに与える影響について、日本ではほとんど検討が行われていない。しかし、米国の研究においては関心を集めた要素であり、仕事に対して満足している母親は、子どもに対してより許容的に温かく接し、また自分が働いているという子どもに対する罪悪感から、その補償として子どもに対してより優しく接すると考えられている (Rallings & Nye, 1979)。逆に、仕事に不満足な母親は、子どもに対してより拒否的、放任的に接するようになり、適切な関わりができなくなる。こうした場合、子どもの心理状態は不安定になり、問題行動も生じやすいとされている (Hoffman, 1963 : Rallings & Nye, 1979)。

米国の先行研究において、母親の職業ストレスの高まりが、母子関係の質の低下を生み、子どもの問題行動などに影響を与えているという結果を示す研究は多い (末盛, 2011)。一方、日本では一部に仮説を支持する研究も見られるが、先行研究そのものが少ないため、日本における職業ストレス仮説の妥当性に関しては明確な結論は出しにくい (末盛, 2011) とされている。

5. 親の職業と青年期の子どもに関する研究

佐藤 (2015) は、親の職業という所与の環境によって、青年期にある子どもたちがどのような心理的経験をしているのか、職種によって心理的経験に差異が生じているのか、また親子関係に関連は見られるのかを明らかにするため、中学生～大学生 1896 名を対象に質問紙による調査を行った。この質問紙の質問項目の大部分は佐藤 (2015) がこの調査のために独自に作成したものであり、親の職業から受ける影響 (24 項目 6 因子 : 親の職業を加味して評価される経験、親の職業を継ぐことの要請、親の職業をほめられる経験、優秀であるようにとの要請、問題を起こさないようにとの要請、親の職業が身近であること) や、親の職業に対する評価 (12 項目 2 因子 : 親の職業に対する肯定的評価、親の職業に対する忌避的感情) などであった。上記の質問紙調査の結果、親の職業に対する評価が親に対する肯定的感情に寄与していることが示された。つまり、親の職業を良いものと見なせる程度が高いと、親に対する肯定的感情が増し、逆に親の職業に対して忌避的感情を持っていると、親に対する肯定的感情を低下させてしまうということである。そして、人より優秀であることを要請されることについては、親に対する忌避的感情を直接低下させる要因にもなっていた。

また、親の職種間による人格的発達や親子関係の違いについては、アイデンティティ形成の程度とセルフエスティームの得点には有意差がなく、親に対する肯定的感情にも有意差は見られず、親の職業の違いが影響を及ぼさないことが示された。しかし、親が教員あるいは医者、看護師といった社会貢献度の高い職業に就いている場合、親の職業を加味して自分が評価されたり、親と同じ職業に就くかのように見られりする経験、親の職業をほめられる経験の多さ、親の職業をいい職業だと認識する高さといった特徴も示されている。親の職種の違いによる心理的経験に差異があるにも関わらず、職種間で人格的発達や親に対する肯定的感情に差が出なかったことについて佐藤 (2015) は、親の職業をほめられる経験は親の職業への肯定的感情につながり、親が社会貢献度の高い職業に就いていることで、親への肯定的感情や同じ職業に就こうとする気持ちを持ちやすくなることもある。一方で、親の職業を加味して自分が評価されたり、親と同じ職業に就くかのように見られたりする経験、優秀であることの要請などに対して、子どもが反発やプレッシャーを感じた場合、このような環境に置かれたのは親が“特別な職業”についているせいだと感じて、親の職業を疎ましく思い、親に対する肯定的感情まで低下してしまうこともあるからだと推察される。「お医者さんの子」「先生の子」という枠組みで見られてしまい、自分個人の自由度が制限されるように感じるとすれば、社会貢献度の高い職業であることが、子どもにとって疎ましい環境として作用し、社会的な圧力として働くこともあると考察している。

以上のことから、多忙化や長時間労働が指摘され、育児との両立が困難とされる小中学校教員である母親と同様に、子どもの側も、母親の長時間労働による共有時間の短さや、職業ストレス、教員という職業に起因する周囲からの評価等より、心理的適応から職業選択に至るまで様々な影響を受けていることが予想される。しかし、教員の子育てについて子ども側から検討した研究は見当たらない。

また、佐藤 (2015) の研究から、親の職業に対する子どもの評価が親に対する肯定的感情に寄与していることや、親の職種によって子どもの心理的経験に差異が生じていることが分かっており、母親が教員であることについて、子どもの捉え方としては、肯定と忌避の分岐が予測される。しかし、上記のような経験が具体的にはどのような経験で、子どもはどのように捉えて、親子関係の質に関わってくるのか、肯定と忌避の分岐の要因については不明である。そのため、質的に肯定と忌避の分岐の要因となる体験を検討することで、教職との両立が困難とされる養育環境や、母親の教職に起因する子どもの独特の心理的経験に対する理解が得られ、今後の教員家庭に対する子どもの心理面での子育て援助に繋がると考えられる。

目的

本研究では、1. 小中学校教員の子育て環境について、これまで調査されなかった子ども側の捉え方、子どもへの影響を検討すること、2. 母親の教職に起因する子どもの独特の心理的経験の具体と、その経験が子どもの母親や母親の教職に対する捉え方の差異にどう影響しているのかを検討することを目的とする。

方法

対象者 小中学校教員を母親にもつ17歳-23歳の高校生～大学生11名(男性5名,女性6名)と、その母親のうちアンケートへの回答を了承した10名を対象とした。母親が調査時点では退職していた場合もあったが、いずれも対象者が高校生時点までは勤務しており、対象となる子どもは、教職と家庭の両立の環境で養育されていたため、同様に分析対象とした。対象者のプロフィールを Table 1 に示した。

Table 1 調査対象者プロフィール

| 対象者 | 性別 | 年齢 | 学年 | 家族構成 | 母親の校種と教科 | 職業志望 |
|-----|----|----|------|-------------|----------|------|
| A | 女性 | 22 | 大学4年 | 父-母-A | 小学校 | 教員以外 |
| B | 女性 | 17 | 高校3年 | 父-母-B-弟 | 小学校 | 教員以外 |
| C | 女性 | 22 | 大学4年 | 父-母-姉-C | 小学校 | 教員以外 |
| D | 男性 | 23 | 大学4年 | 父-母-D-弟-弟 | 中学-5教科 | 教員以外 |
| E | 女性 | 21 | 大学4年 | 父-母-E | 中学-実技 | 教員 |
| F | 男性 | 22 | 大学4年 | 父-母-兄-兄-F | 小学校 | 教員 |
| G | 男性 | 20 | 大学3年 | 父-母-兄-G-妹-弟 | 小学校 | 教員 |
| H | 男性 | 20 | 大学2年 | 父-母-H-弟 | 中学-5教科 | 教員以外 |
| I | 男性 | 20 | 大学3年 | 父-母-姉-I-妹 | 中学-実技 | 教員以外 |
| J | 女性 | 22 | 大学4年 | 父-母-姉-姉-J | 小学校 | 教員 |
| K | 女性 | 18 | 高校3年 | 父-母-姉-K-弟 | 中学-実技 | 教員以外 |

手続き 2015年9月から12月までの期間に子どもへの面接調査を行った。対象者は縁故法とスノーボール法にて募った。回想法を用いた半構造化面接を実施した。面接調査実施前には研究の目的とプライバシーの遵守についての説明、ICレコーダーによる録音及び筆記記録の許可の確認、また質問に無理に答える必要はなく、いつでも面接をやめることができる旨を明記した研究参加同意書に署名を求めた。また、面接の実施場所は、プライバシーが守られ、対象者が安心して会話ができる場所であった。面接調査時間は一人あたり60分から100分であった。合わせて、母親への郵送法による質問紙調査も行った。

調査内容 まず出身地、年齢、家族構成、母親の教科(中学校のみ)といった基本的な情報を尋ねた。次に、「これから、いままでのお母さんとの関わりやあなた自身についてお尋ねします。小さい頃のことなどよく覚えていないこともあるかと思いますが、ゆっくり振り返って、質問について思い出されたことを自由にお話し下さい」と教示をした。面接は、対象者の自由な語りの流れに沿いつつ、佐藤(2015)による親の職業から受ける影響尺度を参考にした内容(親の職業を加味して評価される経験、親の職業を継ぐことの要請、親の職業をほめられる経験、優秀であるようにとの要請、問題を起ささないようにとの要請、親の職業が身近であること)と、小中学校教員の勤務状況から予想される幼児期・児童期の生活への影響の内容(母親が勤務により不在時の保育方法、学校行事への参加の可否)を含む質問項目を用意し、対象者の自由な語りのなかで語られなかった質問項目については適宜質問しながら行った。また、面接の最後に、子ども時代の心理的不適応の調査のため

め、高木 (1991) による小児心身医学の病態像(小児心身症とその周辺) を参考に、夜尿症、夜驚症や爪噛み等の症状があったか、自分で気になる病気や症状、傾向があったかを尋ねた。

母親への質問紙調査では、子どもの育休や保育方法など具体的な養育環境、子どもの成長の様子、母親自身の子育てと仕事に対する捉え方を記述式で調査した。質問項目としては、育休の期間、幼児期の保育方法や、対象の子どもの成長期に沿った子どもの様子やエピソードと、その時期の母親の多忙度 (6 段階の face scale)、また、教員をしていて自身の子育てで良かったことや困ったこと、我が子と生徒との接し方の違いについて、教職が好きか、逆に辞めたいと思ったことはあるか、研究に対する意見などの自由記述欄を設定した。

分析方法 分析は、佐藤 (2008) による質的データ分析を参考に行った。質的データ分析は、単にコーディングによってデータの縮約を行うだけでなく、その一方で、何度となくオリジナルの文脈に立ち帰って、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにしていこうとするところに特徴がある。質的データ分析の大まかな流れとしては、もとのテキストデータから意味単位で切り抜いた文書セグメントを基本的な素材とし、文書セグメントを凝縮して示すための目印として、定性的コーディングを行う。そして、一旦もとのデータから切り離れた文書セグメントを何らかの基準に基づいて整理し、その中からある特徴を持ついくつかの情報を一種の部品として使いながら、一篇のストーリーとして組み立てていくものである。本研究では、母親が小中学校教員であることで起こる独特の子どもの心理的経験について、佐藤 (2015) によって示された、親の職業に対する肯定・忌避の両極端の捉え方が起こる要因という視点で整理し、親の職業の捉え方が寄与すると示された親への肯定的感情への影響についても分析した。

具体的な分析は以下の手順で行った。①録音記録を基に逐語記録を作成した。②逐語記録から、教職に関する語りや母親に対する捉え方に関わる語りを意味のある単位として抽出した (文書セグメント化)。合わせて、母親の質問紙調査の記述内容も文書セグメント化の上、子どもとペアのデータとした。③文書セグメントごとにオープン・コードを付与し、オープン・コードの特徴を整理し、類似したものをまとめ、焦点的コード、上位コードの順に精緻化した。精緻化は、対象者と他の対象者の文書セグメントや他の文書セグメント、逐語記録、質問紙への記述内容に適宜立ち返りながら行った。④焦点的コードと上位コードを、子どもの母親との関わりや母親の教職に起因する独特な心理的経験や養育環境という視点で整理した。⑤④で整理したコードを基に子どもの母親や母親の教職に対する捉え方にどう影響しているのか分析を行った。

結果と考察

1. 小中学校教員の子育て環境と子どもへの影響

まず、子育て環境については、母親への質問紙調査より、子育てにあたっての母親の育児休暇期間がほぼ1年、就学までの保育方法については幼稚園、保育園、祖父母のサポートなどを利用しており、子どもの母親や教職に対する捉え方に大きな変化は見られなかった。児童期では、子どもの母親や教職に対する捉え方が、子育て環境の中で特に母親の帰宅までの保育に関連して差異が見ら

れた。児童期の母親が帰宅するまでの保育環境、合わせて、母親の多忙度では母親への質問紙調査を基に face scale の 6 段階のうち最も辛い表情(以下, 6)をとった時期と有無, 子どもへの半構造化面接から子ども時代の心理的不適応について Table 2 に示した。

Table 2 児童期の保育環境と母親の多忙時期, 子ども時代の心理的不適応

| 対象者 | 母親の帰宅までの保育環境 | 母親の多忙時期 | 子ども時代の心理的不適応 |
|-----|--------------|-----------|---|
| A | 祖母/祖母宅 | 小4～退職(高2) | 小5のころ爪噛み |
| B | 祖父母/自宅 | 中学生～現在 | 特になし |
| C | 祖母/祖母宅 | なし | 特になし |
| D | 一人で待つ | 全ての時期 | 小中学校で爪噛み・神経質 |
| E | 祖父母/同居 | 現在 | 特になし |
| F | 習い事 | | 特になし |
| G | 祖父母/同居 | なし | 特になし |
| H | 祖母/同居 | — | 3歳～12歳:爪噛み 小5～:夜驚症のような症状 高3時:数日間原因不明の難聴 |
| I | 習い事 | 小学生～現在 | 特になし |
| J | 祖母/祖母宅 | なし | 特になし |
| K | 父/自宅 | 出生～小学生 | 特になし |

Table 2 について, 母親の帰宅まで保育方法の違いによって, 子どもの抱く感情も異なっており, 特に母親を待つ間, 「さみしい」思いを語った, A, C, D については, 職業選択としての教員に忌避的であった。また, 子ども時代の心理的不適応については, A, D, H に爪噛み等の症状が見られた。A については, 母親が転勤で劇的に勤務形態が変わって母親が限界を感じるほどの多忙な勤務先になり, これまで A のことを最優先にして行動していたという母親の時間的・精神的余裕が激減したストレスから A の爪噛み症状が現れたことを母子共に振り返っていた。H の母親からは質問紙調査の協力は得られなかったが, H の語りから帰宅時間が日をまたぐほど遅いこともあるほど非常に多忙であり, D についても, 母親は全ての時期で多忙度を最も辛い表情の評価をしており, 家でもいつも仕事をしていたことが語られており, 母親の仕事の多忙度が高いほど, 母親の時間的・精神的余裕の無さにつながって, 子どもの心理的適応に影響を及ぼす傾向が見られた。

また, D と H については, 子どもの頃の母親はいつも怒っている印象で, 母親から勉強することやいい成績をとることを強制された体験を語っていた。D 「強制されてだから...(中略)嫌だった」, H 「子どもの頃に母親が 死んでも悲しめなかったと思う」といった語りからも, 母親に対する肯定的感情がかなり低下していた状態が伺え, A のように母親の多忙による直接的影響というよりも, 恒常的に多忙である母親との精神的余裕のない親子関係からの影響を受けている可能性が考えられる。また, このことは, 佐藤 (2015)による「優秀さの要請」が親への肯定的感情を直接低めるといふ知見とも合致する。

2. 母親の教職に起因する子どもの心理的経験と母親と母親の職業に対する捉え方

次に, 母親の教職に起因する子どもの心理的体験について Table 3, Table 3 を基に子どもの母親と

母親の教職に対する捉え方に影響する要因について Figure 1 に示した。

以下、焦点的コードを<>、下位コードを□、上位コードを【】で示した。

Table 3 母親の教職に起因する子どもの体験

| | 下位コード | 焦点的コード | 焦点的コードの定義 | 該当者 |
|-----------------|--------------------------------|---------------------------|--|--------|
| 母親の仕事の様子・印象 | 子育てと仕事の理想的な両立が難しい様子 | 仕事で時間的・精神的余裕がない母の様子 | 母親が家庭でも仕事のことと時間的・精神的余裕がなく、自分と関わる余裕のない様子。 | ABDH |
| | | 母親の辛そうなる仕事の様子 | 母親が仕事により精神的に滅入っている様子、仕事の愚痴を話し辛そうなる様子。 | ABCFH |
| | 子育ても仕事も理想的にこなしている様子 | 時間的・精神的余裕のなさから母のイライラ | 母親が時間的・精神的余裕のない状態から、イライラして子どもに関わること。 | ABDHK |
| | | 母親の楽しそうな仕事の様子 | 母親が仕事について面白かった出来事や、仕事のやりがいについて語り、楽しそうなる様子。 | ACEFGU |
| 母親の勤務形態による影響 | 母親の勤務によって日常的に受ける影響 | 時間的・精神的余裕のある母の様子 | 自分と無理なく受容的に関わられる時間的・精神的余裕のある母親の様子。 | EF |
| | | 母親の帰宅時間が遅い | 母親の帰宅時間が遅い | 全具 |
| | | 母親の勤務になった際に母親が対応できない | 子どもが病気になるた際に勤務によって、母親が対応不可能であること。 | BC |
| | | 学校行事への影響(児童期) | 母親が学校行事に来れないことが、ほとんど来れないこと。 | EJ |
| 勉強や進路に対する関わり方 | 子どもの意思を尊重する関わり方 | 母親が学校行事に来れないことがある | 母親が学校行事に来れないことが、ほとんど来れないこと。 | BC |
| | 勉強や進路に関して自由を選択させてくれる体験 | 勉強や進路に関して自由を選択させてくれる体験 | 母親が勉強や進路に関して口出しはせず、自由を選択させてくれること。 | AFFJK |
| | 母親の子どもへの期待を反映したブレイクシヤーを与える関わり方 | 勉強から勉強を強制される体験 | 勉強をしなければ母親から怒られたり、手を上げられ、勉強させられる体験。 | DH |
| | | 母親に成績を気にされる体験 | 母親に成績について気にされ、母親のほうから成績に関する話をされる体験。 | BCDHK |
| 周囲からの評価・影響 | 母親の子どもとして知られている体験 | 母親の将来の職業に関する干渉 | 将来の職業に関して、収入的安定を求められたり、特定の職業に就くよう求められること。 | CG |
| | | 100先生の子どものように知られている体験 | 母親の子どもということで、かかわりがついてももらえな、配慮してもらえない体験。 | ABEHJK |
| | 先生の子どものように固執観念で見られる体験 | 先生の子どものように知られている体験 | 学校内で母親の子どもとして扱われており、注目され、ことを容認していること。 | BJ |
| | | 先生の子どものように固執観念で見られる体験 | 責任の重さ、裏目ばかり、母親の教科担任できる立ち方というふうに関われる体験。 | BEJ |
| 母親の仕事に起因する関わり | 母親が先生であること | 先生としての母親を褒められる体験 | 教師や同級生などから、自分も先生にならねばならないと決めつけられる体験。 | ACG |
| | | 母親が先生であること | 母親の教え子などから先生としての母親を褒められる体験。 | CJ |
| | | 母親が先生であること | 先生ですごいね、など母親が先生であることを褒められる体験。 | CJ |
| | | 母親に教えてもらった役に立たなかった関わり | 母親が担当教師などを生かした関わりを教えてくれたが、役に立たないと感じた体験。 | DH |
| 母親の学習面での高くなる関わり | 母親の学習面での高くなる関わり | 母親に教えてもらった役に立たなかった体験 | 母親が担当教師などを生かした関わりを教えてくれたが、役に立たないと感じた体験。 | BDFFJK |
| | | 母親に教えてもらった役に立たなかった体験 | 母親が担当教師などを生かした関わりを教えてくれたが、役に立たないと感じた体験。 | ACEJ |
| | | 進路などへの適当な提案をしてきた体験 | 母親が担当教師であることと自分と適当な進路やコンクール等を提案して来た体験。 | AE |
| | | 教養のつく語りを通して行ってもらった体験(児童期) | 美術や読書など教養のつくような語りを通して行ってもらった体験。 | ABK |

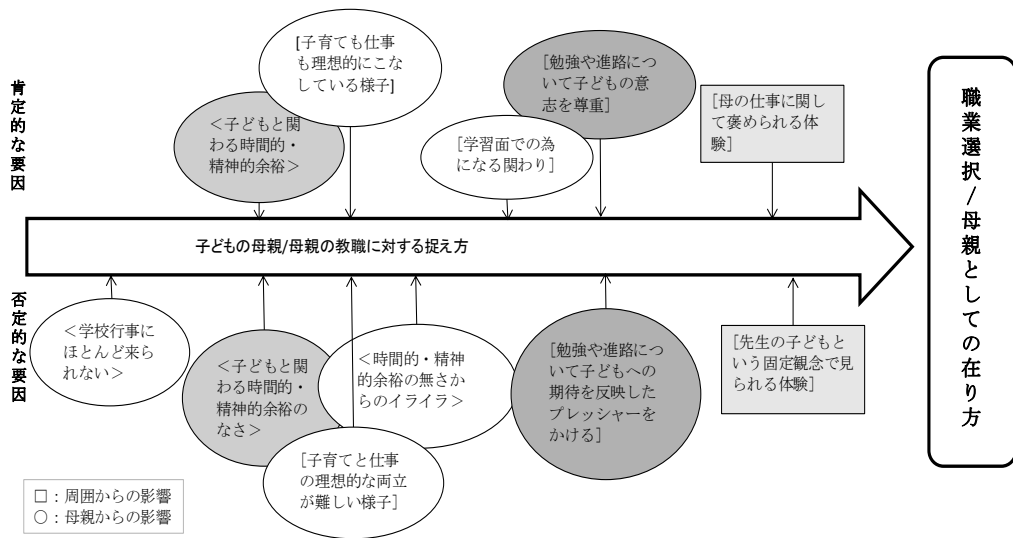


Figure 1. 子どもの母親と母親の教職に対する捉え方に影響する要因

以下、Figure 1 に沿って、子どもの独特の経験が、子どもの母親や母親の教職に対する捉え方の差異にどう影響するのか、肯定と忌避の軸でまとめた。

(1) 母親が学校行事にほとんど来られない

最初の否定的に影響する体験として語られやすかったのが、母親が<学校行事にほとんど来られない>(B,C) ことであった。これは焦点的コードではあるが、特に児童期の子どもにとってそれだけでかなりインパクトの大きい出来事になって、対象者の記憶に残っているようで、「寂しい」「悲しい」など、ネガティブな感情が語られていた。また、母親の[子育てと仕事の理想的な両立が難しい様子]にも繋がるが、特に女性の対象者であったため、母親としての将来の自分の在り方を考えた上で、「やっぱり小学生くらいの子供が一番さみしいと思うから、(中略)...高校生くらいで教員にはならないって決めた」(C)、「娘は絶対に学校の先生にはならないと断言してる。(中略)だって子どもがかわいそうじゃん、って言う」(B の母親)など、職業選択として教職を忌避する一因としていた。一方で、多忙を極めていても、行事等には母親がほとんど参加できたという家庭も多く、その場合、子どもも母親が行事に来られないことを容認できていたり、そもそも気にしていない場合も多かった。

(2) 母親が子育ても仕事も理想的な両立がなされているかどうか

[母親が子育ても仕事も理想的にこなしている様子]については、特に<子どもと関わる時間的・精神的余裕>を子どもが感じていることが特徴的であった。該当する E も J も、「何でも話せる母親」と語っており、母親の自分の母親としての面も、教員としての面も肯定的に捉え、教職を志す職業的な同一化と、「母のようなお母さんになりたい」という母親としての同一化も目指していることが語られていた。E、J は子ども時代には母親を時間的・精神的余裕を持って受容的に話を聞いてくれ

る存在として、現在は教員としても母親としても自分のロールモデルとして捉えており、「何でも話せる」、ありのままの自分を理解し、受容してくれる母親という捉え方にも共通点が見られた。

一方で、母親が[子育てと仕事の理想的な両立が難しい様子]については、母親に<子どもと関わる時間的・精神的余裕のなさ>が見られ、多忙な環境の中で、子どもと関わる時間が満足に取れない、精神的に余裕がない状況が示されている。そうした状況の中では、子どもは母親に「何でも話せる」状況ではなくなっていた。母親と関わる時間の不足から、子どもは母親からの被受容感が低下していると考えられる。実際、Cは母親に対して、児童期に<帰宅時間の遅さへの不満>や<学校行事にほとんど来られない>といった満たされない思いを抱き、中学生以降は「深い話はしない。...(中略)恋愛の話はあっても言わなかった。...(中略)先生だから、そういうモラル的なことに厳しいんだらうなっていうのがすごいあって」「勉強に対する無言のプレッシャーを感じてた」など、母親の教員という面を強調して見ていることが伺えた。また、<時間的・精神的余裕のなさからのイライラ>については、A,B,D,H,Kに見られ、母親が仕事から帰ってきて、イライラしており、子どもは仕事から持ち帰られたイライラをぶつけられることに対して不合理であることを感じ、母親と喧嘩に発展しやすいというケースも見られた。

(3) 学習面での為になる関わり

対象者全員ではないが、母親の専門性を生かして<母親に教えてもらって役に立った体験>や<母親を越えた広い視野での助言をもらう体験>などを行っていることが示された。特に母親の担当教科である場合には、母親に勉強を強制されていて嫌だったと語ったDも、D「(母親の担当教科が)ほんとに分からなかったけん、それは役に立った」と語っていた。また、職業志望としての教職には忌避的であり、母親が仕事で忙しく、寂しい思いをしたと語っていたAも「(母親が教員で良かったことは)教養のつく場所に連れていってくれたり、適したコンクールを提案してくれたり、母の知識を生かしてアドバイスをもらった」と語っていた。実際に役に立った、為になったと感じる体験については、子どもは母親が教員で良かった、と感じ、母親が教員であることへの肯定的感情にプラスに作用することが示された。

(4) 母親の勉強や進路についての関わり方

母親が[勉強や進路について子どもへの期待を反映したプレッシャーをかける]ことについては、母親の職業の安定性から子どもである自分も教員などの安定した職業に就くよう求められたり、母親の養育方針として、Dの母親「勉強ができるようになることに力を注いでいた」と勉強や進路に関してもある程度定められているケースが見られた。そのことについては、全員が程度の差はあるものの否定的な語りをしており、教員という職業上、C「もし親が公務員じゃなかったら、先生じゃなかったら...自分のめっちゃ好きな仕事をやったかもしれないな、っていうのはすごい考える」「好きなときに好きなことしてる子たちが羨ましかった。私はなんか勉強しなきゃ、みたいな。無言のプレッシャーがあるから」等、母親の養育方針と共に、教職にも原因帰属しているケースが見られた。逆に、[勉強や進路について子どもの意思を尊重]する関わりについては、全員が肯定的に捉えていた。しかし、その中でも、F「先生なのに、成績のこととか何にも言ってこんかったな」等と母親に対して、一般的な教員イメージを当てはめて見た上で、当てはまらないことを確かめる

ような語りも何名かに見られ、子ども自身も母親に対して教員イメージを抱きやすい可能性も考えられる。

(5) 母親の仕事に関して褒められる体験

母親の仕事に関して褒められる体験については、どの対象者でもなどポジティブなこととして捉えており、母親の職業に対する肯定的感情につながっており、佐藤 (2015) による知見と一致した。しかし、職業志望としての教職には忌避的な C も、C「小学校のときは、親が小学校の先生ってだけで、なんていうかこう・・・ちょっと誇らしいというか、その事実がなんかただ単に嬉しくて。で、あと、その中学校にあがったときに、私のお母さんが担任した子が同級生にいて、で、何々先生のこと好きだったんよね、みたいなことを言われたときが、ああよかったな、みたいな、思いました」と母親を褒められる出来事等を通して、肯定的な捉え方をしている。そのため、小学生、中学生、高校生と発達していくにつれて、子どもはその他の体験も基に、母親の職業についての捉え方を変化させていくことが考えられた。

(6) 先生の子どもという固定観念で見られる体験

この体験では、<先生の子どもだから〇〇できるだろうと思われる体験>や<先生の子どもになると決めつけられる体験>が挙げられ、親の職業によって、自分の性格、能力や進路について固定観念を持たれることに対しては、嫌悪感を抱いて、母親の職業に原因帰属して忌避的になる要因のひとつとして語られることが多かった。一方で、そういった体験を母親や周囲の友人と共有できる環境にあった E に関しては、「いやだねーって話したりすることはあったけど、そこまで深く捉えてない」と母親の職業に対して原因帰属して嫌になるほど深刻には考えたことがないと語り、こういった独特の体験について、共有できる、理解してもらえる環境では、深刻な問題として捉えられにくくなる可能性が考えられた。

(1)~(6)の子どもの体験と母親と母親の職業に対する捉え方を総合的に見ると、教員の子どもには独特な心理的体験が見られるものの、母親の性格や養育方針の部分の違いや、職場の多忙度によって、子どもの捉え方も異なっており、心理的体験だけではなく、母子の関係性の面も大きく関わっていることが考えられる。加えて、勤務地の近さも子どもの受ける周囲からの評価の質や量に関わることが推察され、母親の勤務地が近く、生活区域が同じ場合は周囲からの評価を受けやすい環境が考えられた。また、【周囲からの評価・影響】、【母親の勤務形態による影響】などにおいて、質的にほとんど同じような体験をしても、子どもが「当たり前のこと」としてそういった体験を容認できる場合と、不満や嫌悪感を抱いて母親の教職に原因帰属し、母親が教員であることへの肯定的感情を低めてしまう場合が見られた。特に、母親という側面でも、教員という側面でも母親をモデルとして目指している、と語った E、J については、母親はありのままの自分を理解してくれる存在であり、家庭では仕事に追われて多忙で精神的余裕のない母親の姿や、厳しい、怖いなどといった教員イメージに沿うような姿をほとんど見ずに、受容的な母親の面を感じながら養育されていたことが伺えた。一方で、不満や嫌悪感を抱いて母親の教職に原因帰属し、母親が教員であることへの肯定的感情を低めてしまう場合には、逆に、家庭でも仕事に追われて多忙で精神的余裕のない母親の姿や、厳しい、怖いなどといった教員イメージに近い姿を見ているケースが多かった。

今後の展望

本研究では、主に養育環境に焦点を当てて、母親の仕事から家庭への影響や子どもの独特の心理的経験について調査した。独特の心理的経験が母親・母親の職業に対する捉え方の違いを生むことが分かったが、同じような心理的経験をしても、母親の教職に対する捉え方が異なっていることも示された。今後は、独特の心理的経験をネガティブに捉え、母親の教職に対する原因帰属に至る関係性、至らない関係性それぞれのあり方に注目する必要がある。仕事との両立が困難とされる養育環境や独特の心理的経験に対する捉え方を、母子双方にとってより適応的なものにする要因や、母親に教員の面と母親の面の両方を見ていることが考えられる独特の親子間の関係性の中で生じる、親子間でのずれの要因や過程を検討することで、今後の女性小中学校教員の子育てに対する心理的な援助に繋がると考えられる。

引用文献

- Bogenschneider, K., Small, A. A., & Tsay, J. C. (1997). Child, parent, and contextual influences on perceived parenting competence among parents of adolescents. *Journal of Marriage and the Family*, 59, 345-362.
- ベネッセ教育総合研究所 (2010). 第5回学習指導基本調査報告書 (小学校・中学校版) ベネッセコーポレーション Retrieved from <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3243> (January 19, 2017.)
- Hoffman, L. W. (1963). Mother's enjoyment of work and effects on the children. In F. I. Nye and L. W. Hoffman (Eds.), *The employed mother in America*, Chicago: Rand McNally, 95-105.
- 細江容子 (1996). 教員のライフコースとキャリア 上越大学研究紀要, 16, 37-48.
- 神奈川県教育研究所 (1952). 教職員の生活時間構造分析に関する調査研究, 教職活動についての実態調査Ⅲ 神奈川県教育研究所
- 直井裕紀・佐藤裕起子 (2013). 中学校教員のワーク・ライフ・バランスとその背景 茨城大学教育実践研究, 32, 71-80.
- 日本労働組合総連合会 (2012). 労働時間に関する調査 日本労働組合総連合会 Retrieved from <https://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/20121227.pdf> (January 19, 2017.)
- 落合貴美子 (2009). パーンアウトのエスノグラフィー—教員・精神科看護師の疲弊— ミネルヴァ書房
- 大谷千恵 (2009). 子育て中の女性保育士・教員の資質と直面している問題 玉川大学学術研究所紀要, 15, 1-15.
- Percel, T. L., and Menaghan, E. G. (1994). *parent's jobs and children's lives*. New York: Aldine de Gruyter.
- Rallings, E. M. and Nye, F. I. (1979). Wife-mother employment, family, and society. In W. R. Burr, R. Hill, F. I. Nye, and I. L. Reiss (Eds.), *Contemporary theories about the family: Research based theories*. New York: Free Press, 1, 203-226.

- Roeters, A., Lippe, T. V., and Kluwer, E. S. (2010). Work characteristic and parent-child relationship quality: The mediating role of temporal involvement. *Journal of Marriage and Family*, 72, 1317-1328.
- 齋藤慶子 (2008). 小学校女性教員における職業と家庭の両立問題 日本教育史研究, 27, 35-64.
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践— 新曜社
- 佐藤 学 (1994). 教師文化の構造—教育実践研究の立場から— 稲垣忠彦・久富善之 (編) 日本の教師文化 (pp.21-41) 東京大学出版会
- 佐藤有耕 (2015). 親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連 筑波大学心理学研究, 49, 45-56.
- 末盛 慶 (2011). 母親の就業特性が子供に与える影響に関する研究動向と今後の課題—3つの理論仮説と先行研究の検討を通して— 日本福祉大学社会福祉学部 日本福祉大学社会福祉論集, 124, 55-70.
- 高橋桂子・濱岡真末・勝沼真恵 (2009). 新潟市公立小中学校教員のモチベーション要因, ストレス要因とワーク・ライフ・コンフリクト 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 8, 49-60.
- 高橋桂子・小谷スミ子・五十嵐由利子 (2001). 教員生活と子育ての両立に関する事例研究—長岡女子師範学校卒業生へのヒアリング調査から 新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 3, 317-325.
- 高木俊一郎 (1991). 小児の症状(反応)、行動の理解と対応への基本姿勢—小児心身医学の立場から— 聖路加看護大学紀要, 17, 26-39.
- 田野井真美・水本徳明・大久保一郎 (2012). 中学校教員のワーク・ライフ・バランス—生活時間と役割葛藤の視点から— 日本家政学会誌, 63(11), 725-736.